

序

本年二〇二〇年は、『更級日記』の作者菅原孝標女が、上総介であった父孝標の任期終了にともない、上総を立出し上京の途に着いた寛仁四年（二〇二〇）から千年目に当たる。その記念として、「『更級日記』千年記念」の論集を編むことはできないだろうかと考えた。

『更級日記』は、長年にわたり層の厚い細密な研究が積み重ねられてきているが、それをもつてしても、いまだ、不分明な部分も多く、本質に手が届きかねるもどかしさをいくつも抱えた作品であるといえよう。そのひとつに、『更級日記』冒頭に据えられた上総と東国の問題がある。上総は、古代から大国として都との交流が密であったことが知られ、国府が市原市周辺にあったことも、諸方面からの精査により確定している。しかし、孝標女たちが住んだであろう国司館や父孝標が執務したであろう国庁の位置はいまだ判然とせず、作品に記される地名も場所も、候補地があげられてはいるものの、結論を得るに至っていないものが多い。いっぽうで、『更級日記』冒頭部分には東国の地名がいくつもあがり、それにまつわる記述が丹念に綴られている。そうしたことを考えると、上総や東国に注視することは『更級日記』理解に大きな意味を持ち、千年記念と銘打つ論集の重要なテーマとなるのではないかと思われた。

ただ、『更級日記』特有の文学的特徴とも絡み、東国の地が経てきた一千年の歳月の壁も厚く、どのようにしたらこの企画を具体化できるのか、なかなか難しい問題であった。思い悩む私どもの背中を押してくださったのは、本企画をお引き受けくださった武蔵野書院院主前田智彦氏のお話であった。土地には目に見えない何かの潜み、その重み

と深淵を理解できるのは、その土地にたいする深い愛着と身についた勘をもった土地の人々なのではないか。生粋の神田っ子の、生まれ育った土地にたいする思いを重ねてのお話は強く胸に響くものがあった。

もちろん『更級日記』は仮構された文学世界でもあり、その出発地である上総や東国も、上洛の記さらには『更級日記』の表現構造の中で位置づけられるものであるが、そうした表現世界の中で、東国を起点とするのはなぜなのかという問題もあらためて問い直されてくるであろう。文学空間としての東国への追究を手放す必要は無いとも考えるが、歴史と風土と文学がそれぞれ越境し、融合し、重なり合う先に新しい『更級日記』論の可能性が浮上してくることも確かなのではないだろうか。『更級日記』研究は、これまでほとんどが平安文学研究のジャンルの中で「京」を暗黙の了解として行なわれてきたが、時代を超え、研究領域を超え、多角的側面から東国の地に光を当てることによって、新しい『更級日記』と孝標女研究へとつなげることができないのではないだろうか。そのような思いのもと、私どもは、『更級日記 上洛の記千年——東国からの視座』を刊行することにした。

本論集では、如上の考えに共感をお寄せいただいた多方面の論者の皆さまに、『更級日記』と「東国」を軸にご執筆いただいた。難しいテーマに向き合ってくださいました論者諸氏に心より感謝申し上げますとともに、お読みいただく皆さまとも一緒に、孝標女の京への出立を祝いたいと思う。

本論集が、『更級日記』研究の新たな千年紀に向けての節目の一書となることができたら幸いである。

『更級日記』の旅の風景

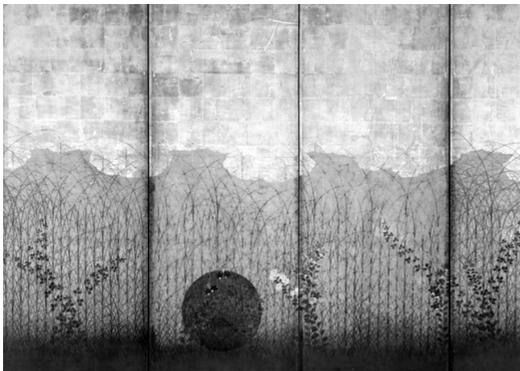
一 武蔵野の月

古歌に云く

武蔵野は月の入るべき山もなし

草より出でて草にこそ入れ

作者不明の歌ながら武蔵野の宏大な野景を歌ったものとして、ながく伝承されてきた歌である。この歌をもとに「武蔵野図屏風」(サントリー美術館蔵)など、多くの絵画が描かれている。武蔵野の月は草の原の彼方から上つてきて、草の原の彼方に沈んでいく。広大な武蔵野ならではの光景なのである。首都圏、東京圏にいる人々にとってはさしも珍しい風景ではないけれど他地域、それも三山に囲まれた平安京に住まう人々にとっては驚くべきこと、信じられないことであった。『更級日記』の作者、菅原孝標女もその一人であった。



「武蔵野図屏風 (右隻部分)」(サントリー美術館蔵)

浅
見
和
彦

寛仁四年（一〇二〇）九月三日、十三歳の彼女は父の上総介の秩満にともない、上総の国府をあとにし、都へと長途の旅に出立する。波打つ海浜の光景に目を驚かせ、宿営の庵も浮き流されそうな豪雨にも見舞われる。太井川の名の通り、川幅広い大河に車ごと舟に載せて渡河を果たす。

おそらく孝標女にとってどれも初めての体験。不安も恐怖もきつとあったに違いない。しかしその不安より彼女の好奇心の方がはるかに強かった。見るもの、聞くものすべてに彼女は強く引き付けられていったのであった。

土砂降りの雨の夜、一睡もできなかった彼女らは翌朝雨の上がったあと、彼女の目に映ったものは、

野中に丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。

風景であった。「丘だちたる所」というのは大河の洪水に備えて作られている水屋のことであるかもしれない。今も関東にまれに残る。しかしその風景は彼女にとって新鮮で物珍しいものであった。

川中に遺る「まのてうといふ人」の家の跡も作者の興味を惹いた。逗留した「くろとの浜」は、

片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明きに、風の音もいみじう心細し。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見む

くろとの浜の秋の夜の月

「はるばると」広がる白い砂浜、繁り合う黒い松原。月光に照らし出される白と黒の世界は彼女の心に深く刻み込まれたと思われる。きわめて絵画的な風景で、一幅の絵を思わせる。

二 竹芝寺のものがたり

太井川を渡った彼女の一行は武蔵の国へと歩を進める。

浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにてむらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる未見えぬまで、高く生ひしげりて、中を分け行くに、竹芝といふ寺あり。

しかし、武蔵野の実景はちょっと彼女の予想とは違っていた。白い浜辺かと思っていたが、一面「こひぢ（泥土）」のようで黒かった。紫草が生えていると思われた原野の景観は「蘆荻あしをぎ」ばかりが高く生い茂って、馬に乗って行く人物の弓先もうもれて見えなくなってしまうくらいだった。彼女は「ことをかしき所も見えず」と失望の色を隠さない。

そんな彼女の心を強く引きつけたのは竹芝寺の物語であった。

著名な話なのでその概略のみにとどめるが、都に徴用されていた東国の男が故郷の俚謡を歌っていたところ、帝の娘が偶然耳にして、東国への下向を男に強く迫る。男は皇女の願いを聞き入れ、武蔵の国へと姿を消す。驚いた朝廷では使者を遣わし、皇女に帰京をうながすが、皇女は拒否する。困った朝廷では男に武蔵の国を与え、内裏のごとき家建てた。その後、そこは寺となり竹芝寺と呼ばれたというのである。

この「竹芝のをのこ」にはモデルがいた。『続日本紀』に名が見える武蔵不破麻呂、あるいは『将門記』に見える武蔵竹芝に比定する説もある。また竹芝寺についても東京都港区の済海寺説が有力だが、足立区にあったともいわれ、またさいたま市の氷川神社も捨てがたく思われる。

